

「単姓」村から複姓村へ
-陝西省関中平原地域の村落に関する事例報告-

東京大学大学院院生 田村和彦

従来、研究の少なかった中国内陸部の村落について事例報告を行なう。発表者は、周辺村落から「単姓」村と見なされている村落にてフィールドワークを行なったが、そこには少なからぬ外来者が含まれていた。今回は、このような人々がどのように吸収/非吸収されてゆくかを、村落の変遷、付近の移民村の事例に簡単に触れながら取り上げる。

1) 村落の概要

村の概観－関中平原中部のヤオトンに居住する本地系中心の村落 A

生業－冬小麦とトウモロコシを主体に、雑穀(胡麻、蕎麦、蔬菜など)、換金作物として綿花から林檎

ごく一般的な関中平原の農村。規模は周辺村落より小さめだが、付近では古い村落として有名。

→資料1「村落位置関係地図」

2) 「A姓の村」という語り方

a: しばしば語られる「A 姓の村」という言葉

- ・ 村名から

A 姓と地形の名称 ヤオトンを掘り耕地を確保するのに適した場所→古い村落

- ・ 開村祖の伝承

1) 風水師: 足の指の割れている身体的な特徴を根拠に、風水宝地に住み着いた者の子孫

2) 漢代から古墳の守りとして: 塬上方にある古墳(紀元前 200 年前後)を守り管理する人々として、
前漢の英雄(A 姓)の末裔を語る

→すべての村民が信じているわけではない。1880 年頃から A 姓には看風水はいない。現在は江蘇省出身の看風水(陽宅のみ)と B2 の巫婆(客民)に依存。

- ・ 伝承を裏付ける祖墳参:

1952 年まで、塬上の祖墳を清明節に掃墓。このときは「兄弟村」B 村 A 姓と合同で祭祀(写真)。A 姓のみに付属地を貸し出す(1953 年まで)。

- ・ 社会主義教育運動～文化大革命期に起った宗族を巡る対立:

A 姓と第二勢力 X 姓による事件

b: 人口比上の区分

- ・ 他姓の比率も少なくない: 同じく単姓村と言われるマーケットに隣接する M 村では、付近で唯一の祠堂(建築物は廟、中庭に系譜関係を記した碑文)があり、9 割以上を M 姓で占める。結束の固い宗族として著名。M 村との比較では、外姓も少なくない A 村を村人の言うように A 姓の村と捉えることは一見難しい。→資料2「ABC 村の姓分布」

3) 変化の機会

- ・ 回民起義を契機として

聞き書き(インフォーマントの最高年齢は 101 歳)の限界点として 80 年前後を出発点として措定。村の

中でもっともよく語られる「歴史」である回民起義と民国 18(1929)年の大旱魃による荒廃。

→資料 3 「関中平原の荒廃と移民政策」

客民で構成された村の誕生

湖北・河南・山東省からの移民と農村の復興、キリスト教の移入によって「福音村」などの誕生。同時に A 村にも客民が定住を始める(村民化?)→資料 4 「C 村 1992 年 P 氏新編族譜：序文」

- ・長工、短工から定住・婚姻へ：民国期、解放初期に現れた村の伝説的人物を例として

「(母親の)積蓄糧食而発家」と本人の才気、自家人減少による土地の集中と都市での成功を農村に還元し、地租を徴収しないで佃戸を雇う。村の「社火」の復活。社会主義教育運動以降の不遇と離村。佃戸はその後 A 村住民となる。

- ・「要的娃娃」の慣行：例として、老人の語り「A 姓になること」

姓に基づいて来歴を明らかにすることだけでは外来者すべてを把握することができない例。「今は A 姓だが本当は別の姓」という語り。理念的な「一門有孩、十門不絶」と対立して用いられる慣用句「樹上只有棗、就能抖下棗」に示されるように、子供に恵まれない家庭、老夫婦にとっての選択肢の一つとして。他姓の幼児の養育と祭祀の継承。「童養子」に類似する「陋習」として反対運動と消滅。近隣県での近年の復活。

→こうした姓をめぐる複雑さの例として、「土地再配分公示」に現れる A(別) 姓。と同時に、村内の日常生活において、姓そのものが問題となる機会の少なさ。

4) 取り込みを支える原理

- ・村内での呼称

親族呼称の援用する村内の呼称と新規参入者の取り込まれ方が容易な方法によるのに対し、自家人内の出生順に基づく排行が与えられない点について。この問題が表出する婚姻の席順や葬儀・三周年の「孝子單」「奠酒單」での秩序として再び輩そして年齢が参照されること。

- ・族譜ではなく YONG(「庸/榮」)であること

当該地域の本地系の人々は冊子状の族譜を作らず、「庸」と呼ばれる家譜を系譜の記憶装置、そして位牌の機能を果たす祭祀対象として用いる。

参考文献

日本語

- 小熊誠 1986「華北農村部における養子慣行の多様性と系譜意識—「中国農村慣行調査」を資料として—」『地域研究』(筑波大学) No. 4
- 河地重蔵 1963「二十世紀中国の地主一族—陝西省米脂県楊家溝の馬氏—」『東洋史研究』No.21
- 河地重蔵 1963「陝西北部の地主経済—二十世紀、陝北馬氏の分析」『経済学報』No.18 大阪市立大学経済学会 編
- 瀬川昌久 1986「客家と本地—香港新界農村部におけるエスニシティの一側面—」『民族学研究』51No.2
- 田村和彦 2001「陝西省関中平原における葬儀」『戸県農民の生活と文化』周星他編 愛知大学国際コミュニケーション学部比較文化学科

中生勝美 1991「親族名称の拡張と地縁関係—華北の世代ランカー」『民族学研究』56No.3

聶莉莉 1992『劉堡-中国東北地方の宗族とその変容』 東京大学出版会

畢紅昱 1999「中国華北農村における祖先祭祀」『比較民俗研究』No.16

深尾葉子 2000「村の歴史」『高度高原の村-音・空間・社会-』深尾葉子他編 古今書院

福武直 1951『中国農村社会の構造』雄斐閣

中国語

秦暉 1999「封建社会的“関中模式”—土改前関中農村経済研究之一」『耕耘者言』山東教育出版社(原載『中国経済史研究』1993年第1期)

延安農村工作調査団 1980『米脂県楊家溝調査』人民出版社(再版)

行政院農村復興委員会 1934『陝西省農村調査一冊』商務印書院

党康琪 1999『党家人説党家村』陝西韓城党家村出版

周若祁ほか 1999『韓城村寨與党家村民居』陝西科学技術出版社

胡必亮 1996『中国村落的制度変遷與權力分配—陝西省商州市王村調査』山西経済出版社(再版)

田培棟 2000『明清時代陝西社会経済』首都師範大学出版社

補足：

塬：中国西北部、黄土高原に特有な地形。黄土が河川によって削られ侵食

回民起義/渭華起義/渭北革命

回民起義：同治初、関中平原東部で起った回民による起義の影響を受け、中部、遅れて西部でも蜂起が起る。A村では付近にその拠点となる要塞が築かれたため、放火、殺害を被り農民の多くが逃走した。解放後、とりわけ範文蘭らによって中国の闘争の歴史が示されるなかで民族闘争として肯定的に評価されたため、A村での語りとは大きな距離が生まれた。

渭華起義：1927—28年に中央「八七」会議精神と指令を受け陝西省内で農民暴動を計画決定。農民と豪紳を戦わしめ、税(糧)に抗い武器を集め武装闘争を目的に関中中部の農民一部を組織した起義。同じ文脈で隣接する3つの県で相次いで蜂起し、県の職員、商人、一部の県城住民を殺害。1928年までに平定される。現在の党見解では極左の冒険主義と位置づけられる。

渭北革命根据地の創建(1931-1933年8月)：中共陝西省委員の指導により、三原党組織により開始。近隣7県に拡大した「殺悪差、分糧財、搗壊区、郷公所」を目的とした起義。県知事や「民憤極大的豪紳」とされた商人、団練、城民が殺害され、33年8月上旬に投入された国民党「渭北剿匪隊」により壊滅。

同県の社会主義教育運動：同県では西安管轄の県より1年遅れて1966年から開始。そのため、文化大革命と連続し、インフォーマントの話のなかでもしばしば一括して扱われる。

捧紙盆：葬儀の出棺に際して、引き綱をもつ(棺の前方に並んでいる)孝子の一人が紙銭を燃やすときに受け皿とした陶器を割る。これを「捧紙盆」という。現在では「土地もないしたいした財産もないから」形骸化し、「執客」(儀礼の執行役)の「礼賓先生」が代行して割ることもあるが、かつてはこれを割った者が複数の子供の纏め役となることから、誰がこの儀式を行なうかしばしば紛糾した。捧紙盆をした者がYongを管理すると説明される。

麦客：麦客は、小麦の収穫時期に生じる差を利用して、収穫とともに移り歩く人々。ほとんどは男で、手ぬぐいと腰に鎌を下げたスタイルが一般的で、同村人、友人、夫婦で行動する。当該地域では、陝北から若干、「西府」と呼ばれる関中平原西部(眉県、宝鶏、鳳翔県、彬県)、甘肅省からやって来た。毎年雇用するグループは異なり、時期には付近のマーケットに集まっているところを交渉して雇用する。かれらは、中庭に幌掛けをして雇用期間を過ごし、収穫を終えて報酬を得るとそのまま次の場所へ出かける。比較的耕地条件に恵まれていたことから、A村から麦客へ出るものはいなかった。